

白雪姫

グリム

菊池寛訳

青空文庫

むかしむかし、冬のさなかのことでした。雪が、鳥の羽のように、ヒラヒラと天からふっていましたときに、ひとりの女王さまじよおうが、こくたんのわくのはまった窓まどのところにすわって、ぬいものをしておいでになりました。女王さまは、ぬいものをしながら、雪をながめておいでになりましたが、チクリとゆびを針はりでおさしになりました。すると、雪のつもった中に、ポタポタポタと三滴てきの血ちがおちました。まっ白い雪の中で、そのまっ赤な血ちの色が、たいへんきれいに見えたものですから、女王さまはひとりで、こんなことをお考えになりました。

「どうかして、わたしは、雪のようにからだが白く、血のように

赤いうつくしいほつぺたをもち、このこくたんのわくのように黒い髪かみをした子がほしいものだ。」と。

それから、すこしたちまして、女王さまは、ひとりのお姫ひめさまをおうみになりましたが、そのお姫さまは色が雪のように白く、ほおは血のように赤く、髪の毛はこくたんのように黒くつやがありました。それで、名も白雪しらゆき姫ひめとおつけになりました。けれども、女王さまは、このお姫さまがおうまれになりますと、すぐおなくなりになりました。

一年以上たちますと、王さまはあどがわりの女王さまをおもらいになりました。その女王さまはうつくしいかたでしたが、たいへんうぬぼれが強く、わがままなかたで、じぶんよりもほかの人

がすこしでもうつくしいと、じつとしてはいられないかたでありました。ところが、この女王さまは、まえから一つのふしぎな鏡かがみを持っておいでになりました。その鏡をごらんになるときは、いつでも、こうおっしゃるのでした。

「鏡かがみや、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」
すると、鏡はいつもこう答えていました。

「女王さま、あなたこそ、お国でいちばんうつくしい。」
それをきいて、女王さまはご安心なさるのでした。というのは、この鏡は、うそをいわないということを、女王さまは、よく知っていられたからです。

そのうちに、白雪姫は、大きくなるにつれて、だんだんうつくしくなってきました。お姫さまが、ちょうど七つになられたときには、青々と晴れた日のように、うつくしくなつて、女王さまよりも、ずっとうつくしくなりました。ある日、女王さまは、鏡の前にいって、おたずねになりました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、鏡は答えていいました。

「女王さま、じよおうここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、白雪姫は、しらゆきひめ千ばいもうつくしい。」

女王さまは、このことをおききになると、びっくりして、ねた

ましくなつて、顔色を黄いろくしたり、青くしたりなさいました。さて、それからというものは、女王さまは、白雪姫をごらんになるたびごとに、ひどくいじめるようになりました。そして、ねたみと、こうまんが、野原の草がいつぱいはびこるように、女王さまの、心の中にだんだんとはびこつてきましたので、いまだは夜もひるも、もうじつとしてはいられなくなりました。

そこで、女王さまは、ひとりのかりうどをじぶんのところにおよびになつて、こういいつけられました。

「あの子を、森の中につれていっておくれ。わたしは、もうあの子を、二どと見たくないんだから。だが、おまえはあの子をころして、そのしょうこに、あの子の血ちを、このハンケチにつけてこ

なければなりません。」

かりうどは、そのおおせにしたがつて、白雪姫しらゆきひめを森の中へつれていきました。かりうどが、狩かりにつかう刀かたなをぬいて、なにも知らない白雪姫の胸むねをつきさそうとしますと、お姫さまは泣いて、おっしやいました。

「ああ、かりうどさん、わたしを助けてちょうだい。そのかわり、わたしは森のおくの方には行って行って、もう家にはけっしてかえらないから。」

これをきくと、かりうども、お姫さまがあまりにうつくしかつたので、かわいそうになつてしまつて、

「じゃあ、はやくおにげなさい。かわいそうなお子さまだ。」と

いいました。

「きつと、けものが、すぐでてきて、くいころしてしまうだろう。」と、心のうちで思いましたが、お姫さまをころさないですんだので、胸の上からおもい石でもとれたように、らかな気もちになりました。ちようどそのとき、イノシシの子が、むこうからとびだしてきましたので、かりうどはそれをころして、その血をハシケチにつけて、お姫さまをころしたしように、女王さまのところに持つていきました。女王さまは、それをごらんになって、すっかり安心して、白雪姫は死んだものと思っていました。

さて、かわいそうなお姫さまは、大きな森の中で、たったひとりぼっちになってしまつて、こわくつてたまらず、いろいろな木

の葉っぱを見ても、どうしてよいのか、わからないくらいでした。お姫さまは、とにかくかけだして、とがった石の上をとびこえたり、イバラの中をつきぬけたりして、森のおくの方へとすすんでいきました。ところが、けだものはそばをかけすぎますけれども、すこしもお姫さまをきずつけようとはしませんでした。白雪姫は、足のつづくかぎり走りつづけて、とうとうゆうがたになるころに、一軒けんの小さな家うちを見つけましたので、つかれを休めようと思って、その中にはいりました。その家の中にあるものは、なんでもみんな小さいものばかりでしたが、なんともいいようがないくらいりっぱで、きよらかでした。

そのへやのまん中には、ひとつの白い布きれをかけたテーブルがあ

つて、その上には、七つの小さなお皿おひらがあつて、またその一つ一つには、さじに、ナイフに、フォークがつけてあつて、なおそのほかに、七つの小さなおさかずきがおいてありました。そして、また壁かべぎわのところには、七つの小さな寝ねどこが、すこしあいだをおいて、じゅんじゅんにならんで、その上には、みんな雪のように白い麻あさの敷布しきふがしいてありました。

白雪姫は、たいへんおなかがすいて、おまけにのどもかわいていましたから、一つ一つのお皿おひらから、すこしずつやさいのスープとパンをたべ、それから、一つ一つのおさかずきから、一滴てきずつブドウ酒しゅをのみました。それは、一つところのを、みんなたべてしまうのは、わるいと思つたからでした。それが、すんでしまう

と、こんどは、たいへんつかれていましたから、ねようと思つて、一つの寝どころにはいつてみました。けれども、どれもこれもちやうどうまくからだにあいませんでした。長すぎたり、短すぎたりしました。いちばんおしまい、七ばんめの寝どころが、やっとからだにあいました。それで、その寝どころにはいつて、神さまにおいのりをして、そのままグツスリねむつてしまいました。

日がくれて、あたりがまつくらになつたときに、この小さな家の主人たちがかえつてきました。その主人たちというのは、七人の小人こびとでありました。この小人たちは、毎日、山の中にはいりこんで、金や銀ぎんのはいつた石をさがして、よりわけたり、ほりだしたりするのが、しごとでありました。小人こびとはじぶんたちの七つの

ランプに火をつけました。すると、家の中がパツとあかるくなりますと、だれかが、その中にいるということがわかりました。それは、小人たちが家をでかけたときのように、いろいろのものが、ちやんとおいてなかったからでした。第一の小人が、まず口をひらいて、いいました。

「だれか、わしのいすに腰こしをかけた者があるぞ。」
すると、第二の小人がいいました。

「だれか、わしのお皿さらのものをすこしたべた者があるぞ。」
第三の小人がいいました。

「だれか、わしのパンをちぎった者があるぞ。」

第四の小人がいいました。

「だれか、わしのやさいをたべた者があるぞ。」

第五の小人がいました。

「だれかわしのフォークを使った者があるぞ。」

第六の小人こびとがいました。

「だれか、わしのナイフで切った者があるぞ。」

第七の小人がいました。

「だれか、わしのさかずきでのんだ者があるぞ。」

それから、第一の小人が、ほうぼうを見まわしますと、じぶんの寝ねどこが、くぼんでいるのを見つけて、声をたてました。

「だれが、わしの寝ねどこにはいりこんだのだ。」

すると、ほかの小人こびとたちが寝ねどこへかけつけてきて、さわぎだ

しました。

「わしの寝どこにも、だれかがねたぞ。」

けれども、第七ばんめの小人は、じぶんの寝どこへいってみると、その中に、はいつてねむっている白雪姫を見つけました。こんどは、第七ばんめの小人が、みんなをよびますと、みんなは、なにがおこったのかと思つてかけよつてきて、びつくりして声をたてながら七つのランプを持ってきて白雪姫をてらしました。

「おやおやおやおや、なんて、この子は、きれいなんだらう。」

と、小人こびとはさげびました。それから小人たちは、大よろこびで、

白雪姫しらゆきひめをおこさないで、寝ねどこの中に、そのままソツとねさせておきました。そして、七ばんめの小人は、一時間ずつほかの小

人の寝どこにねるようにして、その夜をあかしました。

朝になって、白雪姫は目をさまして、七人の小人を見て、おどろきました。けれども、小人たちは、たいへんしんせつにしてくれて、「おまえさんの名まえはなんというのかな。」とたずねました。すると、

「わたしの名まえは、白雪姫というのです。」と、お姫さまは答えました。

「おまえさんは、どうして、わたしたちの家うちにはいつてきたのかね。」と、小人たちはききました。そこで、お姫さまは、ママ母が、じぶんをころそうとしたのを、かりうどが、そつと助けくれたので、一日じゆう、かけずりまわって、やっと、この家を見

つけたことを、小人たちに話しました。その話をきいて、小人たちは、

「もしも、おまえさんが、わたしたちの家の中のしごとをちやんと引きうけて、にたきもすれば、おともものべるし、せんたくも、ぬいものも、あみものも、きちんときれいにする気があれば、わたしたちは、おまえさんを家うちにおいてあげて、なんにもふそくのないうようにしてあげるんだが。」といました。

「どうぞ、おねがいます。」と、お姫さまはたのみました。それから、白雪姫しらゆきひめは、小人の家こびとにいることになりました。

白雪姫は、小人の家のしごとを、きちんとやります。小人の方では毎朝、山にはいりこんで、金や銀ぎんのはいった石をさがし、夜

になると、家にかえつてくるのでした。そのときまでに、ごはんのしたくをしておかねばなりませんでした。ですから、ひるまは白雪姫は、たったひとりですすをしなければなりませんので、しんせつな小人たちは、こんなことをいいました。

「おまえさんのまま母さんに用心なさいよ。おまえさんが、ここにいることを、すぐ知るにちがいない。だから、だれも、この家の中にいれてはいけないよ。」

こんなことはすこしも知らない女王さまは、かりうどが白雪姫をころしてしまつたものだと思つて、じぶんが、また第一のうつくしい女になつたと安心していましたので、あるとき鏡かがみの前について、いいました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、鏡が答えました。

「女王じよおうさま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家しらゆきひめにいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

これをきいたときの、女王さまのおどろきようといったらありませんでした。この鏡は、けっしてまちがったことをいわない、ということを知っていましたので、かりうどが、じぶんをだましたということも、白雪姫が、まだ生きているということも、みんな

なわかつてしまいました。そこで、どうにかして、白雪姫をころしてしまいたいものだと思ひまして、またあたらしく、いろいろと考えはじめました。女王さまは、国じゆうでじぶんがいちばんうつくしい女にならないうちは、ねたましくて、どうしても、安心していられないからでありました。

そこで、女王さまは、おしまいになにか一つの計けいりやく略りやくを考えだしました。そしてじぶんの顔を黒くぬって、年よりの小間物屋こまものやのような着物きものをきて、だれにも女王さまとは思えないようになつてしまいました。こんなふうをして、七つの山をこえて、七人の小人こびとの家いへにいつて、戸をトントンとたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫はなにかと思つて、窓から首をだしてよびました。

「こんにちは、おかみさん、なにがあるの。」

じょうとう

「上等な品で、きれいな品を持つてきました。いろいろかわつたしめひもがあります。」といつて、いろいろな色の絹糸きぬいとであんだひもを、一つ取りだしました。白雪姫は、

「この正直しょうじき

そうなおかみさんなら、家の中にいれてもかまわないだろう。」と思ひまして、戸をあけて、きれいなしめひもを買いとりました。

「おじょうさんには、よくにあうことでしょう。さあ、わたしがひとつよくむすんであげましょう。」と、年よりの小間物屋こまものやはいました。

白雪姫は、すこしもうたがう気がありませんから、そのおかみさんの前に立って、あたらしい買いたてのひもでむすばせました。すると、そのばあさんは、すばやく、そのしめひもを白雪姫の首をまきつけて、強くしめましたので、息ができなくなって、死んだようにたおれてしまいました。

「さあ、これで、わたしが、いちばんうつくしい女になったのだ。」とって、まま母はいそいで、でていってしまいました。

それからまもなく、日がくれて、七人の小人たちこびとが、家にかえってききましたが、かわいがっていた白雪姫が、地べたの上にあたおれているのを見たときには、小人たちのおどろきようといったらありませんでした。白雪姫は、まるで死人のように、息もしなけ

れば、動きもしませんでした。みんなで白雪姫を地べたから高いところにつれていきました。そして、のどのところが、かたくしめつけられているのを見て、小人たちは、しめひもを二つに切つてしまいました。すると、すこし息をしはじめて、だんだん元気づいてきました。小人たちは、どんなことがあつたのかをききますと、姫はきようあつた、いつさいのことを話しました。

「その小間物こまもの売りの女こそ、鬼おにのような女王にちがいない。よく気をつけなさいよ。わたしたちがそばにいないときには、どんな人だつて、家にいれないようにするんですよ。」と。

わるい女王の方では、家にかえつてくると、すぐ鏡かがみの前にいつて、たずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、鏡は、正しょうじき直ちかにまえとおなじに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人こびとの家うちにいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

と、このことを女王さまがきいたときには、からだじゆうの血ちが
いっぺんに、胸むねによつてきたかと思うくらいおどろいてしまいま
した。白雪姫が、また生きかえったということを知ったからです。
「だが、こんどこそは、おまえを、ほんとうにころしてしまうよ

うなことを工夫くふうしてやるぞ。」そういつて、じぶんの知っている魔法まほうをつかつて、一つの毒どくをぬった櫛くしをこしらえました。それから、女王さまは、みなりをかえ、まえとはべつなおばあさんのすがたになって、七つの山をこえ、七人の小人のところについて、トントンと戸をたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫は、中からちよつと顔をだして、

「さあ、あつちについてちようだい。だれも、ここにいけないことになっているんですから。」

「でも、見るだけなら、かまわないでしょう。」

おばあさんはそういつて、毒どくのついている櫛くしを、箱はこから取りだ

し、手のひらにのせて高くさしあげてみせました。ところが、その櫛がばかに、白雪姫のお気にいりましたので、その方に氣をとられて、思わず戸をあけてしまいました。そして、櫛を買うことがきまったときに、おばあさんは、

「では、わたしが、ひとつ、いいぐあいに髪かみをといてあげましょう。」といいました。

かわいそうな白雪姫は、なんの気なしに、おばあさんのいうとおりにさせました。ところが、櫛くしの齒はが髪かみの毛のあいだにはいるかはいらないうちに、おそろしい毒が、姫の頭あたまにしみこんだものですから、姫はそのばで氣をうしなつてたおれてしまいました。「いくら、おまえがきれいでも、こんどこそおしまいだろう。」

と、心のまがった女は、きみのわるい笑いを浮かべながら、そこをでていってしまいました。

けれども、ちょうどいいぐあいには、すぐゆうがたになって、七人の小人こびとがかえってきました。そして、白雪姫が、また死んだやうになって、地べたにたおれているのを見て、すぐママ母のしわざと気づきました。それで、ほうぼう姫のからだをしらべてみますと、毒どくの櫛くしが見つかりましたので、それをひきぬきますと、すぐに姫は息をふきかえました。そして、きょうのことを、すっかり小人たちに話しました。小人たちは、白雪姫にむかってもういちど、よく用心して、けっしてだれがきても、戸をあけてはいけないと、ちゅういしました。

心のねじけた女王さまは、家にかえって、鏡かがみの前に立っていました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、鏡は、まえとおなじようにに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

女王さまは、鏡かがみが、こういったのをきいたとき、あまりの腹はらだちに、からだじゆうをブルブルとふるわしてくやがりました。

「白雪姫のやつ、どうしたって、ころさないではおくものか。たとえ、わたしの命がなくなっても、そうしてやるのだ。」と、大きな声でいいました。それからすぐ、女王さまは、まだだれもはいつたことのない、はなれたひみつのへやにいつて、そこで、毒どくの上に毒をぬった一つのリンゴをこさえました。そのリンゴは、見かけはいかにもうつくしくて、白いところに赤みをもっていて、一目見ると、だれでもかじりつきたくなるようにしてありました。けれども、その一きれでもたべようものなら、それこそ、たちどころに死んでしまうという、おそろしいリンゴでした。

さて、リンゴが、すっかりできあがりですと、顔を黒くぬつて、百姓しやうのおかみさんのふうをして、七つの山をこして、七人の小人こびと

の家へいききました。そして、戸をトントンとたたきますと、白雪姫が、窓から頭まどをあたまだして、

「七人の小人が、いけないといいましたから、わたしは、だれも中にいれるわけにはいきません。」といいました。

「いいえ、はいらなくてもいいんですよ。わたしはね、いまリンゴをすててしまおうかと思っているところなので、おまえさんにも、ひとつあげようかと思つてね。」と、百姓しやうの女はいいました。「いいえ、わたしはどんなものでも、人からもらつてはいけないのよ。」と、白雪姫はことわりました。

「おまえさんは、毒どくでもはいつていると思いなさるのかね。まあ、ごらんなさい。このとおり、二つに切つて、半分はわたしがたべ

ましよう。よくうれた赤い方を、おまえさんおあがりなさい。」
といました。

そのリングゴは、たいへんじょうずに、こしらえてありまして、赤い方がわだけに、毒どくがはいっていました。白雪姫は、百姓のおかみさんが、さもうまそうにたべているのを見ますと、そのきれいなリングゴがほしくてたまらなくなりました。それで、ついなの気なしに手をだして、毒どくのはいつている方の半分を受けとつてしまいました。けれども、一かじり口にいれるかきれないうちに、バツタリとたおれ、そのまま息がたえてしまいました。すると、女王さまは、そのようすをおそろしい目つきでながめて、さもうれしそうに、大きな声で笑いながら、

「雪のように白く、血ちのように赤く、こくたんののように黒いやつ、
こんどこそは、小人こびとたちだつて、助けることはできません。」とい
いました。そして、大いそぎで家にかえりますと、まず鏡かがみのこ
ろにかけつけてたずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、とうとう鏡が答えました。

「女王さま、お国でいちばん、あなたがうつくしい。」
これで、女王さまの、ねたみぶかい心も、やっとしずめること
ができて、ほんとうにおちついた気もちになりました。

ゆうがたになって、小人たちは、家にかえつてきました。さ

あたいへん、こんども、また白雪姫が、地べたにころがって、たおれているではありませんか。びっくりして、かけよつてみれば、もう姫の口からは息一つすらしていません。かわいいそうに死んで、もうひえきってしまったのでした。小人たちは、お姫さまを、高いところにはこんでいって、なにか毒どくになるものはありはしないかと、さがしてみたり、ひもといたり、髪かみの毛をすいたり、水や、お酒で、よくあらつてみたりしましたが、なんの役にもたちませんでした。みんなでかわいがっていたこどもは、こうしてほんとうに死んでしまって、ふたたび生きかえりませんでした。

小人たちは、白雪姫のからだを、一つの棺かんの上にのせました。そして、七人の者が、のこらずそのまわりにすわって、三日三晩

泣きくらししました。それから、姫をうずめようと思いましたが、なにしろ姫はまだ生きていたそのまま、いきいきと顔色も赤く、かわいらしく、きれいなものですから、小人たちは、

「まあ見ろよ。これを、あのまっ黒い土の中に、うめることなかでできるものか。」そういつて、外から中が見られるガラスの棺かんをつくり、その中に姫のからだをねかせ、その上に金文字きんもじで白雪姫という名を書き、王さまのお姫さまであるということも、書きそえておきました。それから、みんな、棺を山の上にはこびあげ、七人のうちのひとりが、いつでも、そのそばにいて番をすることになりました。すると、鳥や、けだものまでが、そこにやってきて、白雪姫のことを泣きかなしむのでした。いちばんはじめ

にきたのは、フクロウで、そのつぎがカラス、いちばんおしまいにハトがきました。

さて、白雪姫は、ながいながいあいだ棺かんの中によこになつていましたが、そのからだは、すこしもかわらず、まるで眠っているようにしか見えませんでした。お姫さまは、まだ雪のように白く、血ちのように赤く、こくたんのように黒い髪かみの毛をしていました。すると、そのうち、ある日のこと、ひとりの王子おうじが、森の中にまよいこんで、七人の小人の家に来て、一晩とまりました。王子は、ふと山の上に来て、ガラスの棺に目をとめました。近よつてのぞきますと、じつにうつくしいうつくしい少女のからだがかはいつています。しばらくわれをわすれて見とれていました王子は、

棺の上に金文字で書いてあることばをよみ、すぐ小人たちに、

「この棺かんを、わたしにゆずつてくれませんか。そのかわりわたしは、なんでも、おまえさんたちのほしいと思うものをやるから。」
といわれました。けれども、小人たちは、

「たとえわたしたちは、世界じゅうのお金を、みんないたたいても、こればかりはさしあげられません。」とお答えしました。

「そうだ、これにかわるお礼なんぞあるもんじやあない。だがわたしは、白雪姫を見ないでは、もう生きていられない。お礼なぞしないから、ただください。わたしの生きているあいだは、白雪姫をうやまい、きつとそまつにはしないから。」
王子おうじはおりいつておたのみになりました。

王子が、こんなまでおっしやるので、気だてのよい小人たちは、王子の心もちを、気のどくに思つて、その棺をさしあげることにしました。王子は、それを、家来^{けらい}たちにめいじて、肩^{かた}にかついではこばせました。ところが、まもなく、家来のひとり^が、一本の木につまづきました。で、棺がゆれたひょうしに、白雪姫がかみ切った毒^{どく}のリンゴの一きれが、のどからとびだしたものです。すると、まもなく、お姫さまは目をパッチリ見ひらいて、棺^{かん}のふたをもちあげて、起きあがってきました。そして元気づいて、

「おやまあ、わたしは、どこにいるんでしょう。」といました。それをきいた王子のよろこびはたとえようありませんでした。

「わたしのそばにいるんですよ。」といて、いままであったこ

とをお話しになって、そのあとから、

「わたしは、あなたが世界じゅうのなにものよりもかわいいのです。さあ、わたしのおとうさんのお城しろへいつしよにいきましょう。そしてあなたは、わたしのお嫁よめさんになってください。」といわれました。

そこで、白雪姫もしようちして、王子といっしよにお城にいきました。そして、ふたりのごこんれいは、できるだけりっぱに、さかんにいわわれることになりました。

けれども、このおいわいの式しきには、白雪姫のまま母である女王さまもまねかれることになりました。女王さまは、わかい花嫁はなよめが白雪姫だとは知りませんでした。女王さまはうつくしい着物きものを

きてしまったときに、鏡かがみの前にいって、たずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
鏡は答えていいました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、わかい女王さまは、千ばいもうつくしい。」

これをきいたわるい女王さまは、腹をたてまいことか、のろいのことばをつぎつぎにあびせかけました。そして、気になって気になって、どうしてよいか、わからないくらいでした。女王さまは、はじめのうちには、もうごこんれいの式しきにはいくのをやめようかと思いましたが、それでも、じぶんでかけていって、

そのわかい女王さまを見ないでは、とても、安心できませんでした。女王さまは、まねかれたご殿てんにはいりました。そして、ふと見れば、わかい女王になる人とは白雪姫ではありませんか。女王はおそろしきで、そこに立ちすくんだまま動くことができなくなりました。

けれども、そのときは、もう人々がまえから石炭せきたんの火の上に、鉄てつでつくったうわぐつをのせておきましたのが、まっ赤にやけてきましたので、それを火ばしでへやの中に持つてきて、わるい女王さまの前におきました。そして、むりやり女王さまに、そのまっ赤にやけたくつをはかせて、たおれて死ぬまでおどらせました。

青空文庫情報

底本：「グリム 世界名作 白雪姫」光文社

1949（昭和24）年3月5日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

白雪姫

グリム

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 菊池寛訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>